大阪・関西万博の成功に向けて

――くるぞ！万博、いくぞ！万博、いかすぞ！万博

2025年日本国際博覧会協会事務総長　石毛博行（いしげ　ひろゆき）

2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）の成功に向け、経団連には、会場建設費の寄付や入場チケットの購入など、多大な支援をいただき、感謝申し上げる。大阪・関西万博は、経団連をはじめ経済界の支援がなければ、ここまで進められなかった。

本日は、大阪・関西万博について、「くるぞ！万博」「いくぞ！万博」「いかすぞ！万博」の三つの観点から紹介する。

くるぞ！万博
――開幕に向けた準備状況

大阪・関西万博は、2025年4月から10月までの半年間、大阪市の人工島・夢洲において「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに開催する国家事業である。現在、161の国・地域と9の国際機関が参加を表明している。これは日本で過去に開催された万博の中で最も多い数であり、大阪・関西万博への期待の大きさがうかがえる。

会場建設は着々と進んでいる。世界最大級の木造建築物である大屋根リングは、2024年8月末ごろまでにつながる予定である。海外・地方自治体・民間・シグネチャーをはじめとした各パビリオンも姿を現してきている。海外パビリオンについては、独自のパビリオン（タイプA、タイプX）で参加する国が52カ国ある。

万博ボランティアについては、目標の2万人を大きく上回る5万人以上の応募があった。会場内の案内を行うEXPOサービスクルーの募集にも、約28倍の応募があった。若者を含め、万博への関心の高さがうかがえる。

いくぞ！万博
――大阪・関西万博の魅力

大阪・関西万博の魅力は、次の五つに整理される。

①世界の今を知る

海外パビリオンは、建築の外観イメージを見るだけでワクワクする内容になっている。例えば、次回2030年の万博開催国であるサウジアラビアのパビリオンは、「スーク」と呼ばれる伝統的な市場をイメージしたデザインとなっている。

「世界の今を知る」ことができるのは、パビリオンだけではない。各国によるナショナルデーが連日開催され、各国からのVIP来訪により、万博会場はさながら外交の場のようになる。

②いのちの未来を考える

八つのシグネチャーパビリオンでは、多方面で活躍する8人のプロデューサーが、大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」を表現する。1970年大阪万博では、岡本太郎氏が「人類の進歩と調和」へのアンチテーゼとして太陽の塔を制作した。時代が移り変わり、「いのち」の見方や捉え方が多様化していることから、シグネチャーパビリオンを八つ作ることとした。

公式キャラクター「ミャクミャク」は、「いのち」を表現したキャラクターである。赤い部分は「細胞」、青い部分は、「清い水」を表している。本日の懇親会にミャクミャクがやってくる。ぜひ一緒に写真を撮っていただければと思う。

③未来技術の体験の場

万博は、いつの時代も未来技術に触れる場である。1970年大阪万博では、携帯型の電話や電気自動車が登場した。大阪・関西万博では、空飛ぶクルマ、水素燃料電池船、自動運転バス、カーボンリサイクル技術、未来の都市、バーチャル万博の準備を進めている。万博史上初の試みとして、全面的キャッシュレスも導入する。

④万博建築を楽しむ

建築めぐりは万博の楽しみの一つである。大阪・関西万博の建築の目玉である大屋根リングは、コロナで分断された世界をつなげることを目的に、建築家の藤本壮介氏が構想した世界最大級の木造建築物である。大屋根リングの内側に各国のパビリオンを並べることで、「多様でありながら、ひとつ」という万博の理念を象徴している。

また、若手建築家による挑戦も支援する。1970年大阪万博では、当時30代の黒川紀章氏や磯崎新氏が設計に携わった。今回、20人の若手建築家が会場内のトイレやステージなどの設計にチャレンジしている。

⑤参加し交流する万博

万博はモノを見る場と思われがちだが、近年は参加し、交流する万博へと変化している。2005年愛知万博では、外国人スタッフやボランティアと親しくなったことが楽しかったとの声が数多くあった。大阪・関西万博でも、参加し、交流する機会を積極的につくっていく。日没後に毎日開催する「One World, One Planet（仮称）」というイベントでは、来場者にスマートフォンのライトをかざしてもらうことで、会場全体を巻き込む。会場では、世界各国のグルメを楽しむことや、多言語自動翻訳を活用して外国人との対話交流も可能である。

いかすぞ！万博
――万博を活かす視点

「企業・ビジネス」と「日本全体」の二つの視点。前者の視点では、社員や家族への福利厚生、関係先の接遇、ビジネス機会創出、若手の育成、国際交流などに活かしてほしい。後者の視点としては、2018年11月の各国投票により、日本が万博のホスト国として選出・信任された重みを忘れてはいけないと考える。世界が分断の危機にある中、大阪・関西万博を通じて、つながりを取り戻すことが大変重要である。

今後、大阪・関西だけでなく、首都圏をはじめ全国で万博の機運を盛り上げていく必要がある。万博の露出を高めることで、機運醸成に協力いただきたい。また、前売り入場チケットの購入と早期の来場をお願いする。

大阪・関西万博の開幕まであと268日。今後とも、大阪・関西万博に関する様々な情報を発信していく。

石毛博行

1950年千葉県生まれ。東京大学経済学部卒業後、1974年通商産業省（現経済産業省）入省。在ジュネーブ日本政府代表部などに勤務し、中小企業庁長官、通商政策局長、経済産業審議官を歴任、2010年に退官。損害保険ジャパン顧問、日本貿易振興機構（ジェトロ）理事長（2011年10月～2019年3月）を経て、2019年5月から現職